

【聖書箇所】 ルカ 4:31～37

31 それから、イエスはガリラヤの町カペナウムに下って行かれた。そして安息日になると、人々をお教えになったが、32 その言葉に権威があったので、彼らはその教に驚いた。33 すると、汚れた悪霊につかれた人が会堂にいて、大声で叫び出した、34 「ああ、ナザレのイエスよ、あなたはわたしたちとなんの係わりがあるのです。わたしたちを滅ぼしにこられたのですか。あなたがどなたであるか、わかっています。神の聖者です」。35 イエスはこれをして、36 「黙れ、この人から出て行け」と言われた。すると悪霊は彼を人なかに投げ倒し、傷は負わずに、その人から出て行った。36 みんなの者は驚いて、互に語り合って言った、「これは、いったい、なんという言葉だろう。権威と力とをもって汚れた霊に命じられると、彼らは出て行くのだ」。37 こうしてイエスの評判が、その地方のいたる所にひろまっていった。

1 カファルナウムの礼拝

「イエスはガリラヤのカファルナウムに下って、安息日には人々を教えられる」。ルカは主イエスのカファルナウムでの礼拝の様子をこのように語り始めます。カファルナウムとはガリラヤ湖の北西の畔の町。マタイによる福音書では、カファルナウムの事を「主イエスの町」と記しています。皆さんの中で横浜に愛着を感じる方は、「横浜こそ自分の町」と思っておられる事でしょう。主イエスも「カファルナウムは自分の町」というほどに愛しておられ、伝道活動の旅から折りあるごとにカファルナウムに帰ってこられていたようです。

この時もそうでした。この直前の聖書箇所では主イエスは御自身の故郷ナザレの町で、人々に殺されそうになり、民衆の殺意の中あとにした事が描かれています。そしてご自分の町カファルナウムに帰ってこられました。

ここでの礼拝は、ナザレの礼拝とは違って豊かな実を結んでいました。それは近隣の町々の人々の耳にも入るほどの素晴らしい礼拝であったようです。だからこそ、直前のナザレでの礼拝で、人々はこう願ったのです。「カファルナウムの町で噂になるような素晴らしい業をなしたのなら、故郷のここでも同じようにしてくれ。そうすれば救い主だと信じてやる」と。ナザレの人々の信仰を躓かせる原因となる程に、人々が噂し羨んだカファルナウムでの主イエスの伝道活動。豊かな実りを得た礼拝。このカファルナウムの礼拝を羨むのはナザレの人たちだけではありません。私たちも、主イエスが力強い御業をなされるカファルナウムの礼拝を心から慕い、あの時、あそこで起こった事が、今ここでも起こしてください！と主イエスと天の父なる神に祈ります。その礼拝の様子をご一緒に見ていきたいと思ひます。

2 権威ある言葉

31 節「安息日には人々に教えておられた」とあります。この「教える」というのは、安息日の礼拝の中で、聖書の説き明かしをする事、説教をする事です。主イエスの説教の言葉は、今までに聞いた事がないような力ある言葉であり、会堂にいた人々はそれまで感じた事のないような驚きに満たされた…とルカは語ります。32 節の「非常に驚いた」と訳された言葉は、「打たれる」という単語を強調したもの、“打ちのめされた”と訳してもよい言葉です。金槌でガツンと殴られたような衝撃を受けた…ということです。人々を打ちのめすほどの力が主イエスの言葉にはありました。

どうしてそんな力があつたのでしょうか。主イエスが雄弁であられたからとか、情熱的な話ぶりであつたとか…というのではなく、主イエスの教えは権威ある言葉であつたからだ聖書は記しています。「その言葉には権威があつた」。

権威とはどういうものなのでしょうか。広辞苑では、「他人を強制し服従させる威力。人に承認と服従の義務を要求する精神的・道徳的・社会的または法的威力。」とあります。つまり、権威とは人を支配する力と言ってよいのです。人々を支配する強大な力が主の御言葉にはありました。

しかし、人間社会における権力者の、人々を上から支配し抑圧する息苦しい権威とは異なります。また、主イエスの権威は学者としての権威でもありませんでした。学者のように、学識、学歴、地位、肩書きにより頼み、居丈高にさへなるような権威の言葉ではなかったのです。そうではなくて、主イエスだけが持つ権威が現れてくるような言葉でした。

主イエスの言葉が持つ支配する力とは何か。神の支配、神の国の力です。主イエスは、今ここに神の支配が始まっている…という事がよくよく分かるような言葉をお語りになったのです。この世の支配のもとにある私たち人間を打ちのめし、打ち砕き、神の支配のもとに新たに生かす、そのような力を持つ言葉です。それが主イエスの言葉の権威でありました。

3 人々の解放のために来られたイエス

私たちの言葉は、必ずしも現実になるとは限らない。いやむしろ、言葉だけに終わる事の方が多い。しかし、主イエスの驚くべき言葉、主イエスの言葉によって始まっている神の支配は、私たちの現実を確実に変えていきます。

どのように変えるのでしょうか。それが今日のもう一つの聖書箇所、イザヤ書 61 章です。主は御自身の活動の最初に、このイザヤ書 61 章を引用してこうおっしゃいました。「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と。イザヤ書 61 章は、バビロニア帝国との戦いに負け、敵国に連れて行かれ囚われの身になっている人々に解放のときがやってくる事を告げています。テーマは囚われからの解放です。「主の恵みの年」というのは、旧約聖書にある、50 年に一度のヨベルの年と呼ばれるもの。ヨベルの年には、それまでの借金が払えずに、自らが奴隷となって借金を払い続けた人は、なんの引換条件もなく、無条件に奴隷の身分から解放されます。借金のかたに取られて

いた土地も返却されます。囚われた人々に神自らが何の代償なしに、自由と解放をもたらす恵みの年なのです。それと同じに、とらわれている私たち人間を解き放ち自由にする為に主イエスは地上にこられたのです。その解放が主イエスの御言葉によって実際に起こった、カファルナウムの礼拝で起こりました。

4 私たちと悪霊

しかし私たちがここで見るのは、「悪霊祓い」とも見える記事です。「何、それ？古代の話しじゃないか」と幻滅するかもしれません。古代の純粋な人々は、悪霊にとりつかれた人を癒した物語を喜んで読んだかもしれないし、感動したかもしれないけれど、現代を生きる私たちには通用しない話…と受け取られがちです。しかし、悪霊とは現代に生きる私たちには何の関係もないものなのでしょうか。

聖書の中での悪霊とは、神の支配に逆らう力です。神の御心にそわない力。神の支配が始まろうとするときに抵抗する力です。荒野で主イエスを誘惑した悪魔の方に私たちを連れて行く力とも言えます。私たちを神から離し暗闇に引きずり込もうとするのです。私たちは全てをきちんと筋道たてて納得できて、わけの分からない力からは自由である、私たちの命に何の影響も及ぼさないのでしょうか。…そういうふうにいえる人が、現代世界にどれほどいるのでしょうか。

たった一日のニュース、昨日一日の出来事を告げているニュースを見ても、私たちが、闇の力が支配する世界に生きている事は明らかなのではないのでしょうか。過労死する人、子どもや寝たきりの人への虐待、虐殺。力弱い人、貧しい人々が暴力の犠牲となる事件が絶えません。暴力を振るう人もまたこの社会の犠牲者、被害者と言える現状があります。科学技術が発展し経済的にも豊かな現代日本社会でどうしてこんな事が起こっているのでしょうか？それは神に逆らう悪霊の力に支配された世界だと言えるのではないのでしょうか。

他人ごとではありません。自分の24時間の生活の中で私たちは自分を振り回す闇の力から全く無傷で生きていると本当に言えるのでしょうか。私たちは一日の内でも様々な出来事に心囚われてしまう者ではないのでしょうか。人を嫌う心、憎む心、人を妬む心、そねむ心が自分の内から湧いてくる事もある、様々な心配ごとからくる不安に胸を占領される事もあるかもしれません。そんな神とは異なる力に私たちは支配されてしまい、神の支配の内にあるとは言い難い行動をとってしまう。家庭内での、職場での、ご近所での、小さなトラブルが起きるたびに、私たちは自分がどんなに闇の力に対して非力であることを認めざるを得ません。特別に大きな問題を抱えていなくても、私たちは神とは真逆の力に様々に圧迫されつつ生活しています。もし、いろんな事で抑圧された状況、ストレスの多い状況に置かれて心身の病になったとしても、私たちはそれを決して他人事とはできない世界に暮らしているのです。

私は神学校に入学するまでコンピューターソフトの会社に勤めていました。

忙しい職場で、月の残業が100時間を超えるのは当たり前、真面目な社員ほど疲弊しきっていました。そんな中で私もうつ状態になりました。何かに縛り付けられたようにからだも心も動かなくなる…そんな状態を経験し、「鬱は気の持ちようなんかではない、本当の病気なのだ」と実感しました。もうこれ以上働いたら死ぬしかない…という所までできていたからこそ、安全装置が働いて身体が動かなくなったのではないかと思うのです。同僚にもうつ病に倒れ苦しんだ人が多くいました。長いあいだ苦しみそのまま会社を去った人たちもいます。

うつ病に長く苦しんだ同僚の中で、私が深く考えさせられた方がいます。彼はとても真面目で責任感が強い人でした。優しい伴侶もえ、子どももでき「さあ、これからだ！」という時、突然うつ病で動けなくなり、会社にも来れなくなりました。奥さんの必死のサポートもあり、心療内科でうつ病の治療して小康状態を取り戻して会社に出てくるのですが、またぶり返して動けなくなり、症状は前よりも酷くなる…そういう事の繰り返しが二年ほど続いたのです。もうこれ以上休んだら自然退社するしかないというギリギリの三年目、彼はようやく本格的に復帰する事ができました。

その彼が、鬱状態から数ヶ月で復帰した私に声を潜めて話しかけてきました。「今まで誰にも言っていないけれども、僕が復帰できたのは霊媒師の〇〇先生のおかげなんだ。人に勧められて妻と一緒に先生の所にいったら、“動物の霊がとりついている”と言われてね、すぐに除霊してもらった。そしたらそこからみるみる元気になった。だから渡邊さんも一度行ってみないか。何かの霊がとりついているのかもしれない」と。私は、理性的で優れた知性の持ち主である彼の口から霊媒師の話が出た事にびっくりしました。ですが、彼を愚かだ…と笑う事はできませんでした。まだ小さな子どもがいるのに職を失うかもしれない…追い詰められて霊媒師に頼った彼と彼の家族を笑える人が何人いるでしょうか。

歪んだ社会の中でストレスを受け続け、まるで悪霊にとりつかれたとしか思えない症状が突然現れる、自分自身を責めてますますひどくなる病状に苦しむ人々、自分の家族に起こった不意の病に立ちすくむ人々、自分たちを捉える暗い力に底知れない不安を感じ、そこからなんとかして抜け出したいと不確かな力にすがる人々。彼らに起こったことは自分とは無関係だ…と断言できる人などいないと私は思います。現代に生きる私たちもまた、神ならぬものに支配されている者、悪霊の権威の中にいる者なのです。今日の聖書箇所が悪霊にとりつかれた男は、私たち自身であり、また私たちの隣人でもあります。

5 悪霊の特徴

そして、今日の聖書箇所には、現代の私たちをも縛り付ける悪霊がどのようなものであるかがはっきりと描かれています。悪霊は神の支配に抗う力ですから、最も敏感に主イエスが自分の強敵である事を感じとり、叫びます。「ナザレのイエス、かまわないでくれ。私たちを滅ぼしに来たのか。正体は分かっている、

神の聖者だ」と。ナザレのイエス、最初に名前を呼んだのは、名前を知る事で敵を支配する事ができる…という古代の考えから来ていると言われています。名を呼ぶことで神の支配をもたらす主イエスに反撃を試みっていますが、名を知っているという事は、悪霊は、私たち人間以上に神というお方、主イエスというお方がどういうお方かを知っているのです。

そして「かまわないでくれ」と続けます。この部分の原語のギリシャ語は「私たちとあなたとの間に何かあるというのか」です。「ナザレのイエスよ、私たちとあなたの間には何もない、全くの無関係ではないか。だから出て行ってくれ。私たちはあなたとは全く関わりを持ちたくない」と主イエスを拒否するのです。つまり、悪霊とは主イエスと父なる神と何の関わりも持たないようにしようとする力なのです。主イエスと何の関わりも持たないようにする…これは私たち人間がこの二千年間、実際にやってきた事です。イエスというお方に対して、「私たちとあなたとの間に、何の関わりがあるのか」そう私たちは言い続けてきたし、今も言い続けて、その声はますます強くなってきているのです。主イエスと関わりを持つと困る、なぜなら、神の支配が自分の所にやってくれば、自分たちは滅びる事になるからです。主イエスに向かって叫ぶ悪霊の姿は、私たちの心に居座り支配しているものの姿でもあります。

6 解放する力

私たち人間を時代を超えて捉え続ける闇の力―悪霊。しかし、その悪霊が大声をあげて抗い、恐れる主イエスの力こそ神の支配、私たちを解き放つ力だとさきほど申し上げました。何から解き放つ力なのでしょうか。

それは罪から解き放つ力であります。「解放する」というギリシャ語は、「罪を赦す」という単語と同じ事からもわかります。私たち人間を縛り付けていた闇の力は、神に背こうとする罪の力なのです。その罪から人間を救い出し、神の支配のもとに生きる命を与えるために、主イエスはこの地上へとこられました。罪の囚われからの解放を宣言してその伝道活動をはじめ、そして地上の命の最後まで、罪を赦す権威ある言葉を語り続けたのです。その主イエスの地上での働きは、ルカによる福音書の十字架上の二つの言葉に凝縮しています。主イエスの権威、主イエスの言葉が示す神の力が如実に現れています。

人となりたる神の御子、唯一人間を正しく裁く事ができるまことの人である御子御自身が十字架にかかり裁かれているその時、罪人を招いた言葉です。一つは、御自身を十字架にかけて殺す者たちに対して示した深い憐れみの言葉、「父よ、彼らをおゆるし下さい。彼らは何をしているか知らないのです」。この「おゆるし下さい」というのが、「父よ、彼らを解き放ってください」と訳せるのです。

また、同じ十字架に苦しみつつ断末魔の中にあって主イエスを仰ぎ見て罪を悔い改める一人の罪人。主イエスは彼に対して「よくいっておくが、あなたは今日、私と一緒に楽園にいる」とおっしゃいます。今日、今、あなたは罪赦さ

れた、罪から解き放たれた。十字架の上、この地上で最も滅びに近い場所、何の希望も見いだせない場所、罪の力が猛威を振るう場所に釘付けされ、縛り付けられている者に対してさえも、主イエスは確かな罪からの解放の喜びを告げられるのです。伝道活動の最初の説教で、「解放を告げる聖書の言葉は、あなた方が耳にした今日、実現した」とおっしゃった言葉を、主は罪を赦す権威をもって絶望の十字架の上でも実際に実現させたのであります。

だからこそ、悪霊に打ち勝つ力は、主イエスのみにあるのです。このお方が我々の罪のために十字架についてくださり、三日目に甦られて、罪に打ち勝ってくださったお方だからです。その尊い十字架の犠牲によって私たちの罪を神に償い、根本的に取り去ってくださったからこそ、罪から解放する力をお持ちなのです。

7 主イエスの地上での臨在

カファルナウムの礼拝では、このように神そのものの方がその場におられて、悪霊たちを戦慄させる力をもったのです。人を赦す事は、神の支配のうちにある事です。いわば天上の出来事です。それが今、この地上で実現したからです。主イエス、神の御子。我々人間を罪に定めるお力のある方、そのお方、裁く者が裁かれる者となって、私たち囚われ人を今、解放して神の支配のもとに移してくださる…それが神を礼拝する場所で起こる事なのです。

そしてこの解放は、私たちにはっきりとした変化をもたらします。礼拝が私たちを変えるのです。どういう変化かというと、悔い改めです。神とは無関係に生きようとする者が、神と深く結びつくものへと変えられるのです。生き方が方向転換する。ただ単に目に見える症状だけを癒すではありません。神を知らなかった者が神を知るようになり、神を忘れていた者が、再び神を知る者となり、そうやって神と深く結び合わされた者となる、神の力の内で生きる者となるのであります。この悔い改めこそ、主イエスの権威ある言葉がもたらすものなのです。会堂の礼拝で、主によって悪霊より解き放たれて傷を負わなかった男こそ、悔い改めた私たち一人一人なのです。

自分の事ばかりで恐縮ですが、さきほどの話の続きです。私がうつ病になったのは、既に教会にかよっている時でした。私は、医師に抗うつ剤を処方してもらって何とか動けるようになると真っ先に教会に行き、教会の礼拝に出るようになりました。そこで、久しぶりに聖書の御言葉を聴き、どんなに動けなくなった私をも父なる神は愛し、子なる神キリストは私のために十字架で苦しんでくださった…と再び教えてもらいました。そうして、限界を超えてまで仕事に自分を注ぎだしたのは、自分の力を過信した傲慢の罪があったこと、また、こんなに愛してくださる父なる神よりも、人の評価を求めた自分であったことに気づかされました。しかし、そんな私でも父なる神は見捨てずに礼拝に招いてくださった…大きな喜びでした。父なる神の愛の内にキリストの十字架の

とで自分の生き方を改めてから、少しずつ日常を取り戻し、回復していきました。そして、心療内科の医師が「もう薬をやめても大丈夫だ」と言ってくれた最後の診察の時、医師が語った言葉が忘れられません。「僕の経験する限りでは、信仰者は信仰がない人より回復が早いし確実のようだ」「君の主治医は僕じゃないね、キリストだ」と。礼拝に働くキリストの力が私を解き放ち立ち上がらせてくれた…この経験は私が献身へ導かれる大きなきっかけとなりました。

私だけではありません。礼拝に集い続けている方々は、様々な人生の危機から礼拝で働くキリストの力によって救い出された方達です。みな、礼拝に働くキリストの力の証人です。

8 昇天日

先週の水曜日は主の昇天を思い起こす昇天日でした。十字架の死、私たち人間の罪を肩代わりしてまことの滅びへと渡された主イエス。その主イエスは、父なる神の力で三日後に甦らされ、新しい命を私たち人間に示してくださいました。その内容がルカによる福音書の最後の主イエスの言葉として記されています。次のようにです。“そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、言われた。「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。わたしは父が約束されたものをあなた方に送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい。」”(ルカ福音書 24: 45－49)。

主の昇天から十日後に降った聖霊、父なる神と子なる神主イエス・キリストから来られた霊なる御神の力によって、2000年後の今も私たちは礼拝を捧げています。聖霊の力によって、「今日、父なる神の恵みの解放は実現した」という主イエスの御言葉が今ここにも響き渡り、悔い改め一命の方向転換が起こるのです。主イエスがその場におられたカファルナウムと本質的には全く同じ礼拝が今ここでも捧げられる一神の限りない恵みに感謝します。